<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>中島敦「文字禍」論：古譚を記述する方法</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Sub Title</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Author</td>
<td>葛西, まり子(Kasai, Mariko)</td>
</tr>
<tr>
<td>Publisher</td>
<td>慶應義塾大学国文学研究室</td>
</tr>
<tr>
<td>Publication year</td>
<td>2004</td>
</tr>
<tr>
<td>Abstract</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Notes</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Genre</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
</tbody>
</table>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.
テクストの冒頭においては「文字の雪が」というふわふわの体があるものか、どうか、という問いかけが示される。この

1. 「アッシリヤ」のパラダイム

テクストの冒頭においては「文字の雪など」というふわふわの体があるものか、どうか、という問いかけが示される。この

野口氏の指摘は、むろし「文字」に対して与えられるべき
ば見られる常套的問題への変身していた。か、やはり「分析」というコンテクストに回収し「文字論」を捉えている。

このように、「分析論」は「分析病」というモーフのコンテクストを参照した時に有効かもしない。しかし、「文字論」のテク
取まるものでない部分が大きいように思われる。本編では「アッシリヤ」という時間に属する物語がどのように語り／記
述されているのか、という点に着目して分析する。そして、その

の語り／記述する方法の特徴を探ることで「古謡」としての文
字論とは何か、ということを考える結果としたいと思う。

問いかけて意味を成すものであったことが分かる。

ここで「アッシリヤ」というは、以降の記述から、アッシ
シュル・バニ・アバル大王の治世第二百十年目の頃に「アッッシ
リヤ」という。「ニネイで、アエル人々である」ことが分かる。「雪」の
存在を認める彼らが「雪」についてどのように考えることか次
もないものの中で、夜、「闇」という、時間の認識の届かずない現象や、「死者

という想像するかもしれない存在、また雪による「誘拐」というの

もおそらく神隠しないへに対する説明であろう。こうした「雪」
アシュレギュラの存在は、しばしば謎めいたものである。その理由は、物語の中での描写が非常に有限であるからである。物語の中で、アシュレギュラは、人間の視点から見た世界を説明する者として登場する。しかし、その描写は、主観的であり、客観的なものではない。そのため、アシュレギュラは、物語の中で、その存在を理解しようと試みる。
凝視によって得られた真実とは、文字はたどる線の交錯であっても不思議な現象を示さないと考えるナブ・アヘ・エリバは、それぞれ異なった視点をもって「文字」を捉えようとしている。文字の性質を観察し、そら文字が示す様々な現象を考察することによって、文字の意義を追究するというアッサリヤーの研究方法である。

つまり、文字の謎を解くためには、文字そのものだけでなく、それを形成する文化や歴史の背景も考慮することが必要である。文字の謎を解くためには、文字の性質に加え、その歴史的な背景や文化的背景も考慮することが必要である。
しかし、『書物狂の老人』が粘土板を碎いて口にすることを可能にしている。しかし、『書物狂の老人』が粘土板を破壊する行為に至るためには、それが『ギルガメシュ伝説の最古版の粘土板』であればならないのである。
「文字」の書き出し方を考察するためには、なおさらテクストがどのように成立しているかをまず認識する必要がある。逆に言えば、テクストがどのように成立しているかを把握することは、「文字」の書き出し方を考察するための重要な要素である。

3. 記述という行為

しかし、「文字」の書き出し方を考察するためには、これからテクストがどのように成立しているかをまず認識する必要がある。逆に言えば、テクストがどのように成立しているかを把握することは、「文字」の書き出し方を考察するための重要な要素である。

このテテクストを考察するためには、まずテテクストがどのように成立しているかをまず認識する必要がある。逆に言えば、テテクストがどのように成立しているかを把握することは、「文字」の書き出し方を考察するための重要な要素である。
テクストの表現を把握するためには、"文字通り"の見出しを理解することが重要である。テクスト内の表現から、記述者がどのように表現をなすかを理解することが求められる。な

テクストの表現には、物語の現在と記述者の現在との関係が重要である。過去への志向性、物語を解釈してその意味を抽出することは、テクストに含まれる重要な意味を理解するための鍵となる。

このテクストの記述者は、物語の現在である "アッシャリヤー" の時間に、記述者の現在との関係を示す表現は、単にこのテクストを "古謳" と解釈することなく、テクストを持って分析することができる。
「瓦」としか見えない、「粘土板」が、「アッシリア」の時代にお
いては「書物」なのだ。一方、粘土板は、物語の現在においては「瓦」であ
るのである。同様に、「記述者の現在においては、物語の現在すなわち「アッシリ
ア」の物語を後代に伝え得る粘土板に見ることができる。これらの観点を交
叉させ、「アッシリア」の物語を新しく生み出す。こうした記述のゆらぎを示す
ことに「粘土板」と「瓦」を対応させて取り扱う。「瓦」と「書物」を
じの中で行われている操作は、単に記述者の現在においては「瓦」としか
見えない「粘土板」が、「アッシリア」の時代において「瓦」であるのだ。
4、「古譯」としての「文字禍」

さて、ナブ・アヘ・エリバの物語に話を戻そう。「文字の霊」によって祸を被ったナブ・アヘ・エリバは、次第に他のさまざまな物質において不思議な現象を見出しているのではないだろうか。

彼が一軒の家をじっと見てある中に、その家は、彼の眠と頭の中、その映像が映ったことを示しているのかも知れない。なぜなら、現在の「幸福」を解読する行為、それが自体を解読しているのかもしれないから。

その「幸福」の当否は別としても、過去と現在が結ばれる行為で、過去をそのままに物語ることは不可能である。解読という作業は、常に過去の時間の物語を現在の時間において語り出すことに他ならない。現在の時間において語られる物語は過去の時間のそれと完全に一致するとはあり得ない。しかもこのテクストの解読者は「アッシリア」の物語の現在を記述者が現在を取り結んで書きつける。それは、二つの時間の変化において解読をし、過去の時間において解読をしたと考えることは、解読の可能性を、このテクストの記述者自体が示そうとしているのではないだろうか。

「常に満ちている」ほど「何時も幸福」と見えることを、ナブ・アヘ・エリバは、その存在を自明視しない者に、それを人間の「幸」を説明することにはならない。では、そのような解読を、解読する行為、それが自体を解読しているか、その結果は、「不幸福」を解読する行為、それが自体を解読しているのかもしれない。

「文字の霊」は、その存在を自明視しない者にとって、それは文字の霊の媚薬の如き妖精的な物質の所為である。}

—9—
文字以外のさまざまな物質に「文字の霊」にしようとするものと同じような不思議な現象が起こり始めている。ナプ・アヘ・エリアは、その他の物質とは、そしてついに人間との差異までが消去されていたのだろう。眼に映る物質すべてが、奇妙に薄れたものになるに違いない。

ナプ・アヘ・エリアが答えていないのは、文字を記して残さなければ「昔在つ　ナプ・アヘ・エリア」であり、文字の役割を示すものである。しかし、ナプ・アヘ・エリアは物質としての文字の役割を説いた自立の言葉を「どうやら、あの人青年に向け、文字の霊の威力を読む　ナプ・アヘ・エリア」を含め、「アッシャリヤ」のパラダイムの中にいる物語の登場人物を含め、「アッシャリヤ」という物語の現在と、そして記述者の現在との間にたたえさせ、「文字防」という物語として記述していく。

「文字防」というテクストを、物語を記述するという面から見たときに浮かび上がるように見えるのが「文字防」である。その後、このテクストに記述する行為の一つの可能体なのであり、またそれを示すこと「古の」「物語」をどのように記述し得るのか、という問いかけもあるのだと言えよう。

本論では、「文字防」における記述主体の役割とその志向に目して考察し、テクストそのものの志向を論じるに留めた。